カラフルな北欧デザインの世界へ

ELLE DECOR

JAPAN
no.192

特別付録
HAY
ミニポスター

エル・デコ OCTOBER 2025

デザインのいいオフィス

クリエイターの美意識が宿る家

PLAYFUL NORDIC DESIGN

プレイフルな北欧デザイン

MEMPHIS TWIST

by MATTEO THUN

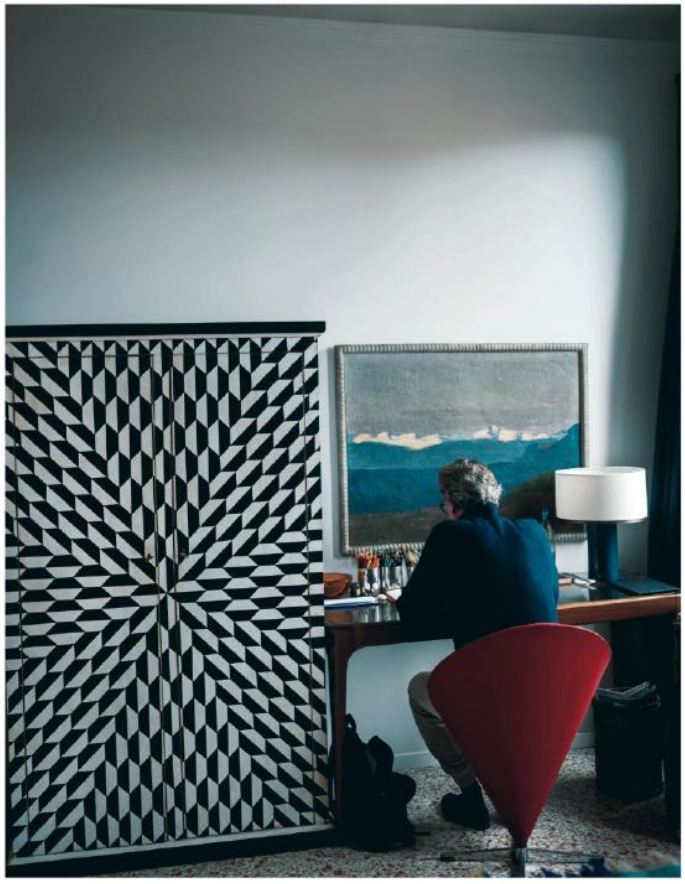
ゴシック様式の旧館とメンフィスが響き合う

80年代に脚光を浴びたデザイン集団「メンフィス」。エットレ・ソットサスと共にその創始者の一人として知られるマッテオ・トゥン。彼がこよなく愛するベネチアの別荘には、濃密な美が渦巻いていた。

Realization FRANCESCA BENEDETTO Photo ANDREA FERRARI

計算されたカオスが居心地の良さを誘う

創造的なミックス＆マッチが展開されるリビング。レザーソファはデパドヴァ、ヴィンテージのデイベッドはマリオ・クリスティアーニ。フロアランプはフェルナンド・オリオル、ヴィンテージのシャンデリアと小鳥が戯れるガラスの木はセグーゾ。正面のアートはバルテュスの作品。



デッサンに没頭する ベッドルームの一角

寝室の一角に置かれたデスクで色鉛筆を走らせるマッテオ。テーブルはフラテッリレヴァッジ、チェアは1950年代のヴァーナー・パントンのオリジナル。ボルトイタリアのワードローブはスザンネのデザイン。壁にはハンス・ウェーバー＝チロルによる南チロルの風景画が掛かる。

壁の装飾が際立つ ギャラリーのようなキッチン

左ページ　キッチンには黒漆塗りの丸テーブルと、キアヴァリ様式の椅子をレイアウト。キャビネットにはビレロイ＆ボッホから発売されたキース・ヘリングのティーセットが見える。壁面には金箔の施されたバロック調の飾り棚が。床を彩るのは伝統的なベネチアンテラゾーだ。

この家では、メンフィスの挑発的なデザインとゴシック様式が共存しています

1980年代に世界中がその活動に刮目したデザイン集団「メンフィス」。このベネチアの家の主はエットレ・ソットサスと共に「メンフィス」を牽引した中心人物の一人、マッテオ・トゥンその人だ。

マッテオとスザンネのトゥン夫妻は、ジャックラッセルの愛犬トニとの散歩を終え、運河に面したザッテレ通りで私たちを待っていてくれた。彼らと一緒にネオゴシック建築の最上階へと向かう。玄関の扉を開くと、見事な保存状態のテラゾーの床が現れ、この家の魅力にひと目で圧倒される。

「以前は街の中心部にアパートを持っていたのですが、水路から漂う〝香り〟をきっかけに、引っ越しを決めたのです」と、美食担当兼、真の旅のオーガナイザーでもあるスザンネは振り返る。マッテオが続ける。

「ちょうどその時、友人がこのアパートのことを教えてくれました。スタジオ・ジル・ボワシエが改装を終えたばかりの建物に空きが出たようだぞ、とね」

創作と芸術に満たされたベネチアでの暮らし

「僕たちにとっては、冬がベネチアで最も美しい季節です。南向きのため暖かく、目の前のジュデッカ運河は海のように見えるのです」

最初の改装時にまずは大きなリビングが確保された。もちろん窓は運河に面している。寄せ木張りのフロアの中央には、エットレ・ソットサスによるメンフィスの作品が鎮座している。その脇にはフランコ・アルビニの本棚があり、タピオ・ヴィルカラがヴェニーニのためにデザインしたムラーノガラスの花瓶が自然光に照らされると、完璧なまでの眺めが広がる。

この家は折衷的なセレクションで家具が配され、大胆でコントラストの効いたスタイルが呼応している。その様子を、マッテオは「対立の交響曲」と表現して笑う。

「メンフィスの最大の功績はまさにそこにあります。つまり、不協和音から調和を生み出すことです。全体の印象が贅沢であることよりも、視点と個性に重きを置いているのです」

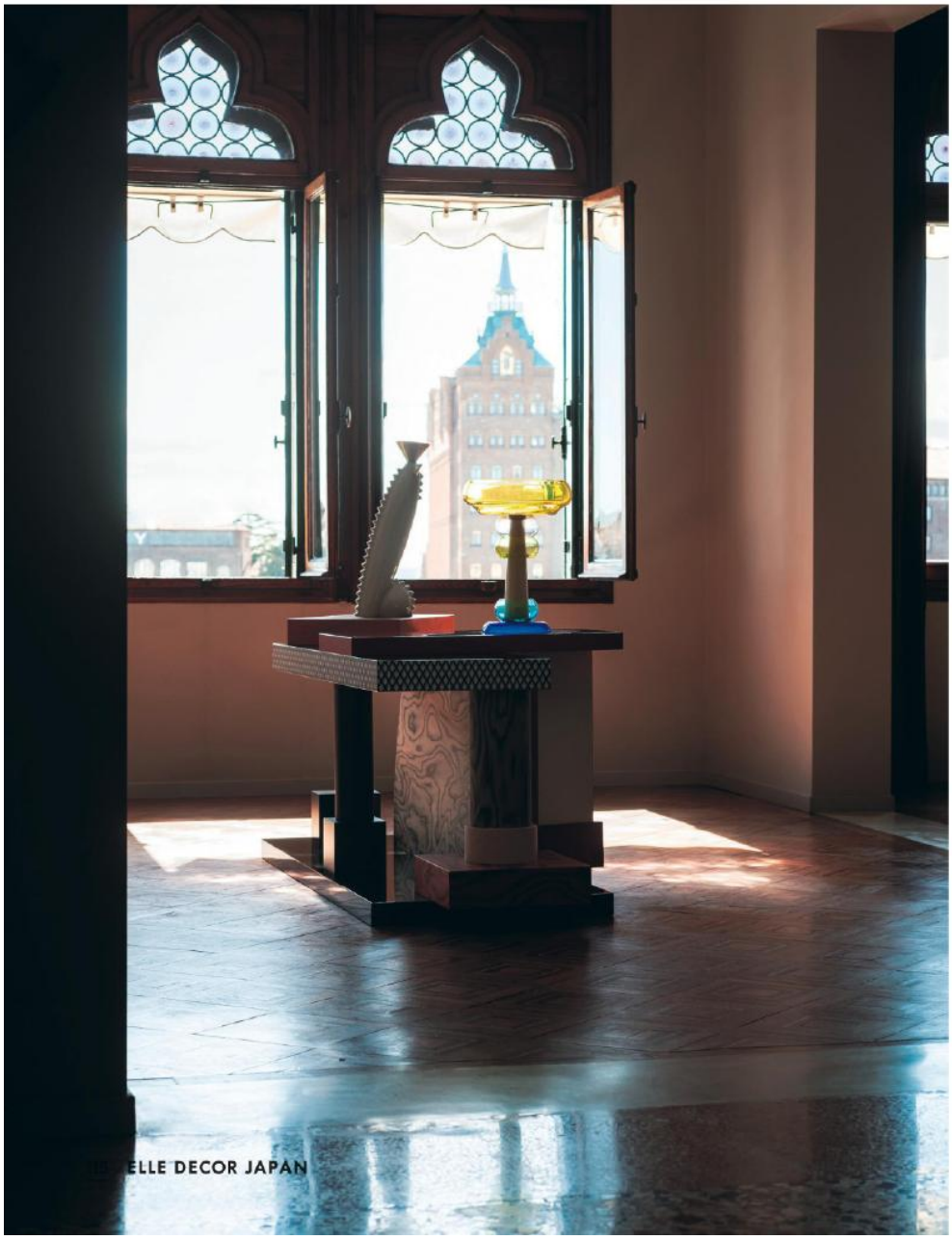
ベネチアと自身との結びつきを、芸術と切り離して考えるの難しいと言うマッテオ。

「幸運だったと思うのは、6歳の時に両親が初めてベネチアビエンナーレに連れて行ってくれたことです。その頃はアートよりもスナックや人混みの中にいる楽しさの方に興味がありましたけれどね」

マルティーノ・ガンバーに特注した14人が着席できる大テーブルが収まるダイニングは、通りを見下ろすテラスへとつながる。この季節に降り注ぐ光は柔らかく、街の輪郭を精彩に浮かび上がらせる。特にその魅力が際立つのは午後の遅い時間帯だ。ここからの美しい眺めこそが、マッテオが「街で最も美しい遊歩道」と評されるザッテレ通りを敬愛してやまない理由にほかならない。

旧知のゲストが集う
幾何学のテーブルトップ

ロンドンを拠点に活動するマルティーノ・ガンパーにオーダーした、特大のダイニングテーブルがダイニングの主役を務める。チェアはマッテオが手掛けたフラテッリレヴァッジの「キアヴァリーナ」コレクション。真ちゅう製のウォールランプはダニエレ・ミンガルドによる作品。右手のドアから運河を見下ろすテラスに出られる。



ジュデッカ運河の夕暮れを リビングから望む

上　ジュデッカ運河の夕暮れ時の眺めは、何にも代えがたい絶景。正面のジュデッカ島には、ベネチアの象徴として知られ、現在も稼働しているフォルトゥニーの歴史的な織物工場が見える。サッシの上の開口部には、ムラーノガラスを用いたオリジナルの装飾が施されている。

ベネチアの陽光を浴びる 80年代のマスターピース

左　リビングルームの中央には、1985年に発表されたメンフィスによる「タルタルコンソール」が美術館のアートピースのように設置されている。その上には2点のガラス作品、エットレ・ソットサスによる「ニオベ」(右)と、マッテオ・トゥンによる「ヴォルガ」(左)が並んでいる。

館の歴史を象徴する エントランスホール

この家を訪れたゲストが最初に目を見張るのがエントランスホールのベネチアンテラゾーの床。現在も完璧な状態が保たれている。正面のアートはロンドンで活動するアルヴァロ・バリントンの作品、ベンチのベルベットの張り地はデダール、黒い照明はセルジュ・ムイユの作品。

白い空間を背景に
色彩とパターンが調和する

キアラステッラ・カッターナによるベッドカバーが、右手のワードローブの柄と呼応している。サイドテーブルはインディア・マダヴィ、その上に置かれた照明はマッテオによるパンゼーリの「トゥビーノ」。壁の写真は、カルロ・モリーノ邸を撮影したフランソワ・アラールの作品。